

◆平城宮北辺地域の調査 —第293-3次・第293-4次

1. 平城宮北方遺跡の調査（第293-3次）

はじめに 個人住宅建設に伴う調査。平城宮北面大垣の西北角から東に約80m、北に約45mの位置にあり、地形的には北から南へ向かって低くなる傾斜地にあたる。南北に長い3m×2mの調査区を設定した。

検出遺構 調査区の中央に東西方向の基壇状の高まりSX01を検出した。この遺構の高い部分は地表下20cmにあり、幅1m内外の平坦面で、南側と北側は30cmないし40cm低くなっている。SX260の北端および南端近くはシルト質土の地山であり、その内側の南北幅1.6~1.9mの範囲は表面がとても固く締まっている。断面図にみると、この部分は掘込地業の積み土である。南側の掘込線は削平されて分明でないが、北側ではおよそ32°の傾斜で掘り込まれていることがわかる。掘込地業内の積み土は40cmの厚さで21~25層あり、土質は粗砂と細かい礫との混じった粘質土を基調としている。

掘込地業SX260は建物ないし築地壠の基壇に伴うもの

と考えられる。SX260の築成土層の細かさをみると、調査地のすぐ東に15~16世紀に存続した超昇寺城の中核部が想定されているものの、これに伴うものとは考えがたい。近隣地での既往の発掘調査の成果をみると、いずれも住宅改築等に伴う小規模な調査であるが、今回の調査地の西8mで実施した第282-17次調査では、SX260の南約5.5mにあたる位置で、柱間寸法が10尺(3.0m)の東西方向の掘立柱列が確認されている。また南方約15mの第223-2次調査では幅約1.5mの奈良時代の人工的な東西溝のあったことがわかっている。この東西溝は平城宮の北面大垣の推定位置の北約25mにあり、そこから今次調査のSX260までは約18mの距離がある。

まとめ 地形図にみると、この一帯は急な傾斜地であり、平城宮の時期には離壇状に造成された比較的小規模な敷地が続いていたとみられる。平城宮の外ではあるが、さらに北にある前方後円墳群(日葉酢媛命陵古墳など)との間に位置するこの地域には、整然とした方位を示す掘立柱建物や基壇を伴う構築物あるいは溝などのあったことがわかり、平城宮の北側の性格を究明する上で興味深い様相を示している。

2. 平城宮西北地区の調査（第293-4次）

はじめに 調査地は平城宮の西北角に近い、佐紀池の西40mに位置する。すぐ北側には3mほどの急な段差があり、佐紀神社や釣殿神社のたつ丘陵が迫っている。

検出遺構 調査区の南東部分では現地表面から15cmで黄灰色粘質土の平坦な地山面である。それ以外の部分は濠状の深い落ち込みSD18060となる。調査区の中では、90°に屈曲する濠状遺構SD18060の岸の西北角を確認したにとどまるが、幅は東西2.5m以上、南北5m以上と推定される。底は平坦面をなし、遺構検出面からの深さは90cmをはかる。このSD18060の埋土には粘土や腐植土が目立ち、滞水していた期間が長かったことを示している。

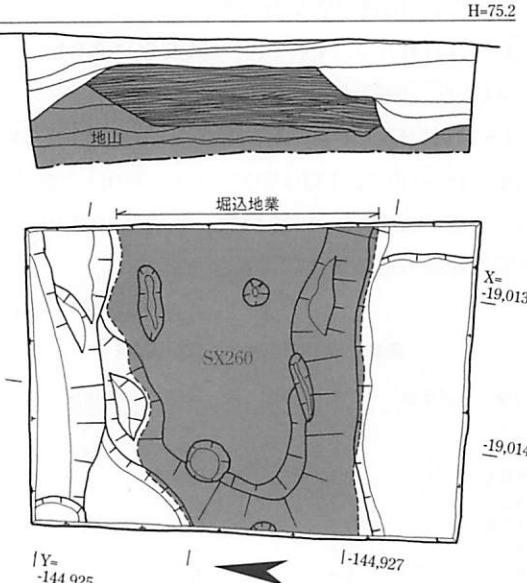


図33 第293-3次調査 遺構平面図・断面図 1:50



図36 平城宮西北角周辺の地形図 1:2500

18世紀頃の陶磁器や瓦片が出土しているので、埋没の時期はその頃であろう。SD18060からは、破片であるが、鞘状の木製品も出土している。材質はサクランボ属で、内側を幅3.2cm、厚さ1.8cm以上に削り抜き、その先端を尖円頭形につくっている。

まとめ 調査地の北方には15世紀中頃から16世紀後半までの記録に現れる超昇寺氏の居城、超昇寺城の故地があり、一辺が30mほどの方形の主郭を中心に空堀、外郭などの城郭構造が比較的明瞭に現地形に遺存している。村田修三氏により復元された縄張案の南端は、今回の調査地の北80mほどにある（村田修三「超昇寺城」『日本城郭体系第10巻』1980）が、その南にも、主郭の立地する佐紀丘陵が続き、前述の約3mの段差に至る。

超昇寺城は数度にわたる破却と修復を繰り返したあと、天正8年（1580）の一国破城の時までその存在がしられる。濠状遺構SD18060が埋没したと考えられる18世紀とは、やや年代差があるが、人為的に埋められた形跡のないことや、周辺の地形から判断すると、SD18060が超昇寺城の南辺に関わる遺構である可能性が高いと考える。

調査地は奈良時代の庭園遺構の確認された佐紀池の西に隣接した場所にあるが、今回の調査地には、平城宮に直接関わる遺構は遺存していなかった。（井上和人）

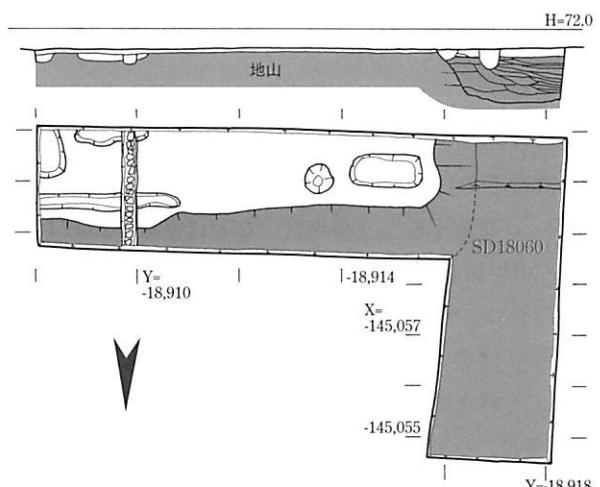


図34 第293-4次調査 遺構平面図・断面図 1:50

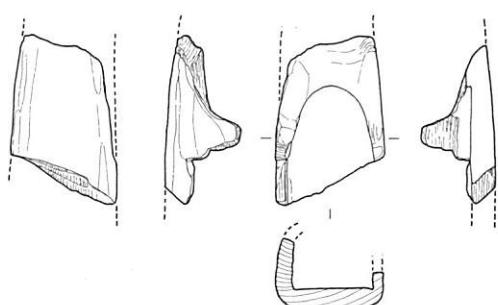


図35 第293-4次調査出土 鞘状木製品実測図 1:3